観光文スポ･県土･交通常任委員会　参考資料
令 和 ８ 年（２０２６　年）５月１４日
観　光　文　化　ス　ポ　ー　ツ　部

キッズアートセンターの整備とポンピドゥー・センターによるコンサルティングの必要性について

1　ポンピドゥー・センターとは

ポンピドゥー・センターは、1977年にパリに開館した、フランスを代表する国立の複合文化施設である。欧州最大級の近現代美術コレクションを有する国立近現代美術館を中核としながら、Bpi（公共情報図書館）やIRCAM（音響・音楽の研究機関）とも連携し、視覚芸術、舞台芸術、映画、音楽、デザイン、建築、研究、教育を横断的に扱う機関として、国際的に高い評価を受けてきた。

同センターの特徴のひとつは、開館以来、子どもや若者、家族に向けた教育普及活動にも力を入れてきたことである。現代美術を「見る」だけでなく、アーティストとの協働、身体的・感覚的な体験、創作活動を通じて学ぶプログラムを継続的に展開しており、パリの本館では、子ども向けの展示・ワークショップの場である「子どもギャラリー（Galerie des enfants）」や、若者向けの「Studio 13/16」などを運営してきた。

近年では、0～6歳を対象としたアート体験施設「mille formes」を、フランス国内の地方自治体（クレルモン＝フェラン市およびモンペリエ市）と連携して展開している。さらに、2030年の再開館を目指す本館リニューアルにおいても、Bpi等と連動しながら、乳幼児から若者、家族までを対象とする「New Generation Hub」を館内に位置づけ、次世代の来館者に向けた学び、体験、創造の機能を強化する方針を打ち出している。

このように、ポンピドゥー・センターは、諸芸術、ラーニング、創造活動を結びつける国際的な複合文化機関であり、子どもや家族を対象とした次世代型ミュージアム機能の設計において、豊富な知見と実績を有している。

2　次世代型ミュージアムの機能構築としてのキッズアートセンター

1984年に開館した滋賀県立美術館は、多様な企画展や教育プログラムを実施するとともに、日本とアメリカの近現代美術、滋賀ゆかりの美術、アール・ブリュット等を柱とするコレクションを形成し、県民に開かれた活動を展開してきた。しかし開館から40年以上が経過する中、美術館を取り巻く環境は大きく変化している。関西圏では2000年以降も新たな美術館がオープンし競争は一層高まっている。これに対して当館は、公園に位置するという豊かな環境を有する反面、公共交通によるアクセスなどに課題があり、来館者数についても厳しい状況が続いている。再整備においては、築40年以上の建物の改修だけではなく、美術館そのものの役割と魅力を再構築することが不可欠である。

改正された博物館法を見ても、今後の美術館には、子ども、家族、学校、地域、福祉、観光、環境学習をつなぐ、総合的な学びの拠点としての役割が求められている。その中核として、今回構想しているのがキッズアートセンターである。それは単なる「子どもの遊び場」ではない。アーティスト、デザイナー、教育者等との連携に基づき、子どもたちが自ら考え、つくり、試行錯誤し、他者と関わるための場である。また、子どもや家族が継続的に美術館を訪れるきっかけをつくり、学校教育、福祉、地域活動、観光との連携を広げるための新たな公共的機能でもある。

公園の自然環境、現代美術やアール・ブリュットなどの当館のコレクション、教育普及活動を結びつけることで、滋賀ならではの次世代型ミュージアムを構築することができるだろう。これは、関西圏における当館の差異化を図るだけでなく、公立美術館の新たなモデルを滋賀から提示することや、国際的なミュージアム・ネットワークへの参画を進める上でも重要な取り組みである。

3　滋賀県にとって期待される効果

第一に、子育て世代に選ばれる地域づくりに寄与する。キッズアートセンターは、県内の親子が継続的に利用できる文化・教育の拠点となるとともに、京都・大阪方面からの家族層を呼び込む新たな目的地となりうる。こうした質の高い子育て環境、学びの環境が地域に存在することは、滋賀県で子どもを育てたいという意識を高める要素となり、移住・定住促進の観点からも重要である。

第二に、美術館とびわこ文化公園の来訪頻度を高める効果が期待できる。企画展は美術館の魅力を発信する重要な機会である一方、テーマや出品作家への関心によって来館動機が左右される。安定的な来館を生み出すには日常的・継続的に利用できる機能が必要であるが、その点キッズアートセンターは、子ども向けの半常設的なプログラムを中心に運営されるため、親子や学校等による反復利用を促しやすい。またこれにより、カフェ・ショップの利用や公共交通利用などへの波及も期待できる。

第三に、学校教育・幼児教育・福祉との連携を進めることができる。キッズアートセンターは、鑑賞教育、創作活動、探究学習、インクルーシブ教育、ウェルビーイング施策と接続しやすい。

第四に、企画展依存の運営リスクを補完できる。2か月程度の企画展を年に数本開催して集客を図る従来型の運営方法には、財政面・運営面で持続可能性に課題がある。これに対してキッズアートセンターでは、8～10か月程度を一会期とするインスタレーション型プログラムを基本としている。その結果、年間を通じた安定的な来館、学校・園の利用、親子の反復利用を生み出すことが期待できる。

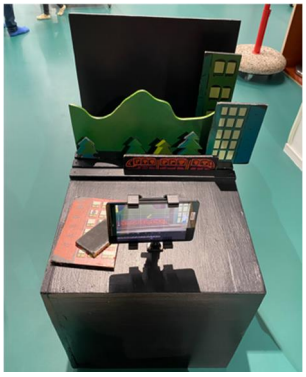
4　なぜポンピドゥー・センターのコンサルティングが必要か

滋賀県立美術館が目指すキッズアートセンターの実現には、空間、プログラム、運営体制、更新サイクル、評価指標を一体的に設計する必要がある。

Exposition-atelier « Totemic » de Damien Poulain, Centre Pompidou et mille formes Clermont-Ferrand © Damien

これに対して、ポンピドゥー・センターは、パリの自館において、現代美術と子どもの学びを結びつける長年の実績を有している。さらに、フランス国内の地方自治体との協働により、mille formesと呼ばれる新しいタイプのキッズアートセンターを開発・展開している。これらの施設は、0～6歳の子どもを対象としており、子どもの発達段階に応じたプログラム設計、アーティストとの協働、空間の安全性、鑑賞と創作の関係、運営体制、更新サイクル、評価方法を総合的に組み立てている。

滋賀県立美術館では、増築・改修工事後のリニューアルと同時に、キッズアートセンターを確実に機能させることが求められる。そのためには、開館後に試行錯誤を重ねるのではなく、構想段階から空間、プログラム、運営、人員、評価のあり方を精度高く設計しておく必要がある。ポンピドゥー・センターのコンサルティングを受けることは、複数の先行事例に基づく知見を導入し、整備後の運営リスクを低減するとともに、県としての投資効果を最大化するうえでも重要である。



クレルモン＝フェランの milles formes におけるコマ撮りアニメーションの制作のためのツール

キッズアートセンターは、滋賀県立美術館を次世代型の文化・教育拠点へ転換するための中核事業である。その構想を国際的水準で具体化し、県民に成果を説明できる計画とするためにも、ポンピドゥー・センターのコンサルティングを受けることには十分な必然性と重要性がある。

目玉となる作品の収集について

1　企画展モデルから常設モデルへ／一点豪華主義的な絵画から空間的作品へ

日本の美術館は、その歴史的経緯から、企画展を中心とした集客モデルに大きく依存してきた。また、バブル期には、フランス印象派を中心とする著名作家の絵画作品を一点豪華主義的に購入し、美術館の開館時のいわゆる目玉作品とする事例も少なくなかった。

しかし、企画展中心の集客モデルは、日本の場合、新聞社や企画会社が企画・制作した展覧会を美術館が購入するという仕組みによって成り立ってきた面が大きい。これは美術館に十分な資金がなければ継続が難しく、特に諸経費が高騰する近年では、モデルの持続可能性にも懸念が生じている。

また、絵画作品を「目玉となる作品」として位置づける場合、作品の美術史的価値は高かったとしても、来館者は「一度見た」ことで満足しやすく、継続的なリピーター創出につながりにくい。さらに、美術館同士の相互協力主義の観点から、貸出依頼があれば可能な範囲で応えざるをえず、常に展示することも難しい。その結果、「行けば必ず見られる」という来館動機を形成し難しい。

こうした状況を踏まえると、今後の美術館における「目玉となる作品」は、高額な名品を購入することではなく、美術館の建築、立地、ヴィジョン、教育普及活動、地域の特性と一体となって機能する常設作品として考える必要がある。そして、そうした作品には次のような効果がある。

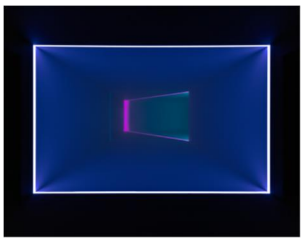
- **常にその場所にある作品として認知される。**
  貸出や展示替えがないため、「行けば必ず体験できる」という明確な来館動機を形成できる。
- **一度に複数の来館者が体験できる。**
  空間全体を使っているため、鑑賞体験を多人数で共有しやすい。
- **建築や周辺環境と一体化した体験を生み出せる。**
  美術館の建築空間や導線と緊密に結びつき、その場所でしか成立しない体験と実感できる。
- **写真撮影や口コミを通じた広報効果が期待できる。**
  来館者がSNS等を通じて「そこに行った」ことを共有しやすいため美術館の認知度が向上する。
- **子どもや現代美術に馴染みのない来館者にも開かれた体験となる。**
  絵画などの伝統的なジャンルは作品解説を読まなければ理解できないケースが少なくない中、空間的な作品は、歩く、見る、感じるといった身体的な体験を通じて、直接的にアートを感じられる。
- **企画展に過度に依存しない、持続的な来館動機を形成できる。**
  展覧会ごとの集客変動に左右されにくく、美術館の基礎的な魅力を長期的に支える資産となる。

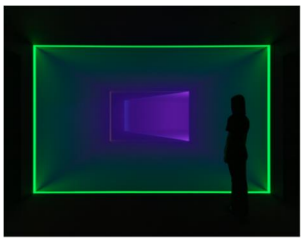
美術館の近隣に住む方々やアートファンにとって、企画展はいまなお重要な来館動機である。一方、親子連れやインバウンドを含む観光客にとっては、子ども向けにどんな体験が用意されているか、いつ訪れても見られる魅力的な作品や空間があるかが、来館を判断する大きな要素となる。

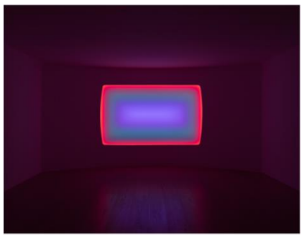
来館者数の低迷が続く滋賀県立美術館においては、今回の整備を、単なる施設更新にとどめるのではなく、こうした来館動機の変化を踏まえた再整備として位置づける必要がある。企画展に加えて、子どもや家族が継続的に利用できる機能、そして美術館を象徴する常設的な魅力を整えることで、今回の投資を将来にわたる来館者基盤の拡大と、美術館の持続的な価値向上につなげることができる。

特に、当館ならではの象徴的な常設作品を持つことで、企画展の内容や会期に左右されず、「いつ訪れても出会える」美術館の魅力を高めるとともに、県内外、国内外の観光客に対して、「滋賀まで行く理由」となる新たな来館動機をつくることができる。

2　候補となるアーティスト（整備基本計画にも記載）







ジェームズ・タレル（James Turrell, 1943–）

タレルは、光と空間、知覚体験を主題とする、世界的アーティスト。当館が収集方針のひとつとしているアメリカの現代美術を象徴する存在でもあり、2013年のニューヨークの個展には47万人が訪れた。

国内では、金沢21世紀美術館が《ブルー・プラネット・スカイ》を恒久展示、直島の地中美術館ではタレルの初期から近年までの代表的なシリーズから選ばれた3作品をいつでも体験できるようになっている。これらの事例は、タレル作品が美術館建築と一体化し、来館者の体験を形成する常設作品として高い効果を持つことや、ファンが国内外に存在している事実を示す。

今回候補にしたい作品２点は、いずれも、国内の美術館には収蔵されていないシリーズに属する。また、現時点で国内の他の国公立美術館が新たにタレル作品の収蔵を検討していることは、集めることのできた情報の範囲では確認されていない。そのため、当館が収蔵できれば、アジアでも有数の質を誇るアメリカ現代美術コレクションを強化するとともに、国内の公立美術館の中で明確な差別化を図ることができる。

上2枚　James Turrell, *The Wedge*, 2025 ©James Turrell

下2枚　James Turrell, *The Looking Glass: Wide Rectangular Curved Glass*, 2021 ©James Turrell

3　近年の国内公立美術館での事例

美術館	象徴的な常設作品	整備の経緯・特徴
松本市美術館 2002年開館	草間彌生《幻の華》2002年 （1929年、長野県松本市生まれ）	開館に合わせて委嘱制作された高さ約10mの屋外作品。前庭に設置され、美術館の顔となっている。2002年当時、草間の国際的評価は高まりつつあったが、現在ほど一般的な知名度はなく、先見性のあるコミッションであった。
金沢21世紀美術館 2004年開館	レアンドロ・エルリッヒ 《スイミング・プール》2004年 （1973年、アルゼンチン生まれ）	開館時に委嘱制作された代表的な常設作品。依頼の契機は2001年に当時の学芸課長がヴェネチア・ビエンナーレで作品を見たこととされる。当時作家は20代後半で現在ほどの知名度はなく、21世紀美術館というコンセプトを体現する作品となった。
青森県立美術館 2006年開館	奈良美智《あおもり犬》2006年 （1959年、青森県弘前市生まれ）	建築設計と一体的に構想された委嘱作品。同館は開館前の1998年に、青森ゆかりの国際的作家として奈良作品124点を一括収集しており、その流れの中で実現した。
長野県立美術館 2021年新築開館	中谷芙二子《Dynamic Earth Series Ⅰ》霧の彫刻 #476102021 （1933年、札幌市生まれ）	新築開館に合わせて屋外に設置された常設作品。フォトジェニックで来館動機になりうる一方、霧を用いることと、長野の気候条件により、例年11月下旬から4月上旬頃までは休止する。

令和８年度　美術館の主な取組

１．展覧会の開催

様々なテーマで美術を楽しんでいただける企画展４本と、常設展を通年開催。

特に、現在開催中の「ためして、みる展　さわって照らしてねそべって!? アートを楽しむ 10 のトライ」展（会期６月 21 日まで）では、美術館の収蔵作品を「畳の上で寝そべって見る」「双眼鏡を使って見る」「暗闇の中で懐中電灯で照らして見る」等、能動的な体験として 10 種類のトライで鑑賞する展示内容となっており、子どもや美術に詳しくない方にも楽しんでいただける内容となっている。

（令和８年度当初予算　100,990 千円）

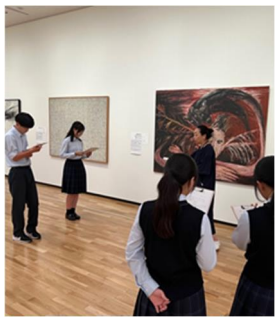
２．作品の収集・保全

作品収集方針に基づく美術作品の収集と、作品の修復等を行う。

作品収集については、購入と寄贈によってコレクションの充実に努めており、令和 7 年度には購入 1 件（1,760 千円）と寄贈 46 件（評価額 54,919 千円）の作品を収集した。

（令和８年度当初予算　17,000 千円　うち、作品購入は 8,800 千円）

３．スクールプログラム



県内の小中高等学校、特別支援学校等の児童生徒が美術に出会い体験する機会を提供するため、学校団体での来館や、遠隔地の学校については出前授業などに取り組んでおり、令和７年度には 56 校 2,011 人の子どもが参加した。

今後、美術館整備の完成後は「アートの子」としてさらなる充実を図る予定。

４．湖北における現代美術展

令和７年度から３年かけて、県北部地域３市において現代作家による展示を行い、北部地域の魅力を発信ことにも寄与する取組。

第１弾として令和８年２月から４月にかけて 27 日間、高島市大溝地域の旧店舗を会場に「キュンチョメ 100 万年の子守唄」展を開催した。来場者約 1,600 人のうち約 6 割が関東、中部、関西など県外からであり、大溝の町並みや店舗を歩いて回り楽しまれた方が多かった。

第２弾は令和８年秋に米原市で、第３弾は令和９年春に長浜市木之本で開催する予定。

（令和８年度当初予算　7,056 千円）

５．子どもと一緒に楽しめる美術館＋ナイトミュージアム

令和 6 年度から、美術館への来館のハードルを下げ、子どもからお年寄りまで多くの方に美術館を身近に感じていただける試みとして「みんなでつくる！みんなで楽しむ！美術館の夏祭り！」を開催。

朝から延長開館の夜 8 時まで、展示鑑賞や創作の体験、飲食店出店、江州音頭など、一日楽しんでいただけるメニューを用意し、令和 6 年度は 2,695 人、令和 7 年度は 3,200 人の方にお越しいただいた。今年度は 8 月 29 日に開催予定。

６．企業等との連携

法人、個人から寄附により美術館の運営をサポートしていただくための「サポーター制度」を導入。令和 8 年度は 3,360 千円（法人 9 件、個人 12 件）の寄附をいただいた。

特に、「イシダフリーサタデー」「木の家専門店　谷口工務店フリーサンデー」として企業寄附により毎週土日曜日の常設展示の無料化を実現し、昨年度は約 12,500 人の方に気軽に展示を楽しんでいただいている。

今後、美術館整備においても幅広く支援をいただけるよう、取り組む予定。

７．SMoA（えすもあ）やわらか大計画

高齢や障害、不登校など、様々な理由で社会とつながりにくい人たちにも美術館を利用いただき、心身の健康や幸福感の向上に美術館が貢献できるよう、令和 7 年度から福祉施設等と連携しながら美術鑑賞をしていただくなどの包括的な取組を開始している。なお SMoA は滋賀県立美術館の英語名称（Shiga Museum of Art）に基づく略称。